

これでは勝たん

福岡市西区 川越 敏彦

警戒警報のサイレンの鳴る回数が段々多くなった。その度に「警戒警報発令」と町内を大声で叫びながら走り回るのが私の役目になっていた。時に昭和20年、中学2年生だった。

当時、殆どの男達は戦争に駆り立てられ、中学生が男の端くれとして銃後の護りを自負して頑張っていた。神国日本の勝利を信じ全身これ大和魂に燃えていた私は、福岡空襲など考えもしたくなかったが、すでに昭和17年4月に東京など5都市は空襲を経験していた。

当時食料は極端に不足し、私たちは空腹を抑え学業を放棄して、軍需工場で飛行機生産に懸命だった。米の顔を拝むこともなくさつま芋ばかり食べ、胸やけによるゲップと屁ばかりしながら工場で夜遅くまで頑張っていたが、空腹と寝不足による疲労のため不良品ばかりができて、検査から製品がよく戻されてきた。初めの内は残業をすると夜食に丼飯が出たので、それを食いたいばかりによく残業をして飢えを凌いだ。人数を誤魔化しては2人分も食べていた悪い奴もいた。

隣組の物資配給も段々不足不足の毎日で、久しぶりに配給になった鰯が1人半匹の割当のため、頭と尾をめぐって隣同士で喧嘩した悲しい話もあった。

戦況は段々悪化していったが、大本営は嘘ばかり発表して、何時も我が方の損害は軽微だった。しかし何時までも隠しきれずに、やがて撤退とか玉砕の文字が新聞紙上に現れて、国民の心を暗くどん底に追い詰めていった。もう、福岡の空襲は必至だった。

焼夷弾が天井板に引っ掛かって危険であると、天井板を外させた馬鹿な指導者がいた。空襲を受けて分かったのだが、天井板の有無は焼夷弾には全く関係なかった。結局無駄な作業であったが、外さないと非国民にされた。批判は決して許されなかった。邪魔になる多量の天井板のお蔭で毎日風呂に入ることができ、いつ死んでもいいような清潔な体になった。しかし、天井から時々埃が落ちてくるのには弱った。

芋ばかりで胸やけするので、母が芋の葉や南瓜の葉を茹でたが、南瓜の葉は喉につかえて駄目だった。

今にして思えば不思議なことだが、当時の栄養不足の生活の中でも国民に病人が少なかったのは事実で、まさしく『病は気から』とでも言うべきであろうか。もっとも病気にでもなったら死ぬしかなかったかも知れない。空腹でも不思議とよく寝れたのは極度の疲労のせいだったか、とにかく子供ながらも暇があるとよく寝た。

戦局は益々悪化し、国民はいらいらの毎日を送っていた。すでに同盟国のドイツやイタリアは降伏しており、日本は孤立の中で勝てる見込みの無い戦いを続けていた。

国防婦人会のおばさん達は防空頭巾を被り、もんぺ姿でバケツリレーや竹槍の訓練をしていたが、どの顔も憔悴し切っていた。バケツリレーで消火ができるのか、竹槍で敵が果たして殺

せるのか。

6月19日の夜、ついに「B29」60機の来襲を受けた。その日は朝から妙に蒸し暑く、日照りの強い日だったと記憶している。空襲警報のサイレンと同時に焼夷弾の無差別爆撃が始まった。

当時私は浜の町に住んでいたが、中洲方向に最初の火柱を見たような気がしている。我々は慌てて家の防空壕に飛び込んだが、既に焼夷弾はばらばらと落下していた。壕の中で震えていると、あたかも雨が振るように焼夷弾が「ざあー、ざあー」と音と立てて降ってくる。恥ずかしながら怖い震えで耐えていた。火の手が我々の防空壕の近くの燃料小屋に飛び火して危険になったので、あらかじめ池の水に濡らしていた布団を頭から被って、火の塊が周囲に飛散し物凄い風が酷熱の火柱を空に吹き上げる中、家族全員命がけで練兵場前の掘端に逃げ込んだ。

逃げる途中、中年の将校が日本刀を空に向かって振りかざしながら、声高に叫んでいる姿を見た。空襲の怖さに気が狂ったらしい様子だった。この姿を見たとき、私は日本の敗北を見せつけられたようなそんな悲しみを覚えた。

避難してよく見たらズボンの裾が焦がれ、油がべっどりと付着していた。完全に打ちのめされ、敵愾心も起こらなかった。

無事だったことに大した喜びも感じず、生への執着も淡々とした心境だった。逃げる途中に見た焼死体にも別段の感傷は無かった。

翌朝、昔近くに住んでいた知人が私たちが被災したことを知り、粟の握り飯と沢庵を持って見舞いに来られ、我々はその握り飯を貪り食った。今でもあの味は鮮明に記憶の片隅に残っている。

一睡もできずに次の朝を複雑な気持ちで迎えた。私はまだ余熱の残る電車線路の上を歩きながら、博多駅の裏の方向にある工場へと急いだ。道端に幾多の黒こげの死体、半分焼けた死体が散乱して、まるで地獄絵を見るが如くであり、私はいい知れぬ興奮に震えながらその中を突っ走った。異臭が私を執拗に追いかけて来た。焼け爛れたビルの残骸がぽつん、ぽつんと哀れな姿をさらけだしていた。敗者の悲惨な姿がそこにあった。

途中、呉服町の銀行の地下から数人の男たちが、色々の靴を運び出している光景を目撃した。後で分かったことだがこの銀行の地下に避難した人達が、電源が切れ扉が開かずに憤死したとのものであった。工場には殆どの友達に来ており、お互いの無事を喜び合った。女学生も沢山駆けつけていたが、私の好きなUさんの姿がなかった。彼女が焼夷弾の直撃を受けて亡くなったことを知ったのは暫く後のことだった。

そして私の初恋は無惨にも儂（はかな）く終わった。8月6日広島に、8月9日長崎に原爆が投下され、戦争は終わった。

福岡空襲の死者は902人と記録に残っている。